

桃の節句

今月もまた花いけのお稽古の為お寺に伺ひにけり。桃の節句を間近に迎へんとせるお寺の玄関には、赤き毛氈敷き詰めたる時代物の見事なる雛壇飾られたり。御内裏様に両脇ぼんぼり、三人官女、五人囃子、左大臣に右大臣、右近の桜、左近の橘に調度品に牛車に籠。華やかにして楽しき気配漂ふなり。

眺めたたずみたるその時に、桃の花届けられたり。花材を届くるを好例とせる花屋さんより伺ふに、桃の枝はまだ寒き時期に早々に枝切りて新聞紙に包み、冷たく暗き室^{むろ}の中にて保存さるとのことなり。店頭には桃の節句に合はせて取出され、並べらるる由なり。今届きたるこの桃の枝も室から出され、久々に陽の光をあびて蕾の急に息を吹き返したやうに見ゆれど、あらあら、その桃の枝を手取るなり蕾ははらはらと落ちたり。桃の特徴は花が枝に直^{ひた}と着きて咲きたるごとく見ゆるが、實はさにあらで、枝をば優しくそと扱はねば蕾は一段と散るものなり。新幹線にて通ひくる友は、「家路に着く頃には蕾皆落ちて枯れ枝だわ」と言ひて、周囲^{まわり}を笑ひの渦とせり。桃一種にて格花をいくるには、かかる心得のあるべきなり。

茶道においては三月の利休忌に菜の花を床の間飾ると聞けり。其がためか、水盤にてのいけ方は桃と菜の花の取り合はせなり。春色なる桃色と黄色まじりあひたりて教室一面が華やかにして明るくなりけり。されど手本として先生のいけし桃の花は正面玄関の雛壇脇にそと飾られ、皆の稽古で残りし桃の小枝は小さき花瓶に挿されて、寺の玄関のテーブルや飾り棚、お手洗いの中の鏡の前にも置かれければ、館内至るところに春の香添へられたり。

我が娘も今は嫁ぎて、自宅にお雛様を飾ること無くなりたるが、久々に桃の花と雛壇飾りを眼の前にし、我も幼子の如く節句を迎へし嬉しき気持ちになりけり。脳裏に浮かぶは、我故郷の幼き日を過ごせし小さき部屋に飾られたる御内裏様なり。日暮れて周囲は薄らかになりしかど、電球点けずうす暗き部屋に我獨り頬杖つきてなにおもふでもなくぼんぼりを見つめつつ、かかる我が少しは大人に近づきたるかとの氣分を味はひしことなど思ひ出しにけり。その折、雛壇の脇に飾られしガラスケースの「潮汲」の日本人形は、ご近所の方々よりわが妹の初節句祝ひとて賜りしものなり。その隣に飾られたる「藤娘」人形はさらに七年前に頂きし我初節句の人形なり。わが故郷にては、同じ回覽板を回す隣保班より女兒誕生の折、日本人形を送るといふ風習ありけり。その風習も我が生家も今は無くなりしかど、桃の花をいくることから、わが心にはそのぼんぼりの淡き光の光景のみがしきりと懐かしく鮮明に思ひ出されたるなり。

されば、今日我は歸り道、雛あられなど買ひ求めんと思ひけり。桜餅に菱餅に、砂糖がまぶされし雛あられなどもたくさん、然りたくさん買ひて歸らんとぞ思ひける。而して我が故郷にある老いて外出難しき實家の母にも送らんと思ひける。しかりしかり、昔母が我

達姉妹にしてくだされたるがごとくに。